

新しい詩の声2020・作品

〔最優秀賞〕

## 小林

### 新しい光

きみが齧ったパンの多分、黒糖の焦げ付いたよう  
な甘ったるさの末路だったね。

錆びた光にずぶぬれだった窓。ガラスの割れぬこ  
とが穏やかさであるならば。

ただ静寂をふんだんに浴びていることの。

次の電車がいつなのか分からないまま、

駅へ向かう。そのポケットの手には握られていな  
かった切符のように、

ぼくは心臓へと帰宅する。

すぐにタクシーを呼ぶのは駄目人間だときみは

言ったつけ。

そうかも知れないね。いま、

歩き始めて何分くらい？ でもわずかな湿り気を  
吸る気にさえなれないんだ。

つまらない広告塔ばかり流れてゆく街。

きみがいればすてきな街の、

ひとつずつにさえ失望してゆけばいいのだろうか。

ぼくは。

きみが何かしゃべってくれれば、空にふくらんで

ゆくものが漂白剤の臭いだったかまわない。

だって、余白がまぶしいよ。

きみのせいで雪が降ってきてぼくの街は壊れてし

まったんだ。だからここがどこであるかなんて、

すばらしい戸惑い。

新しい雪が。新しい街に降ってきて、

こうして車のタイヤに汚されてゆくことの、

新しい光。

ねえ。

いま、夜から見失われた微笑みは白く跳ね返って

ぼくの目を刺す。

つるつると凍ったアスファルトの道を滑ってしま

わぬようにゆっくりと歩く。

歩く。足踏みかも知れないけれど。

〔優秀賞〕

## 青山 勇樹

### 墓碑銘 ΕΠΙΤΑΦΙΟΣ

そこに行けばいつも心地よい風が吹いていた  
穏やかな風がどんなときもたしかに吹いていた  
なだらかな坂をのぼって海沿いの小さな丘に出る  
海岸線に立ち並ぶプロペラはゆっくり回りつづけ  
砂浜の足跡は尽きることなく行方をたどれない

眼を閉じているとやがて額に降りてくる  
かすかに前髪をなでる吐息にも似た気配がある  
いなくなつてから過ごした歳月のほうがもう  
あなたの年齢をすっかり超えてしまったけれど  
ここではきまつてすべてが柔らかに包まれる

海へ伸ばした指先で何度も繰り返しながら  
空に刻まれたあなたの名前をなぞってみる

待ちかねたように優しい光が幾つもこだまする  
吹いてくる吹いてくるまた風が吹いてくる

吹いてくるあなたがくるあなたがまたきてくれる

せつなさがあふれてどうにも止められないときは  
誘われるまま透きとおる青になって海をわたる  
おそろくのちはいくたびも姿を変えるだろう  
いつかあなたとひとつになるからきつとなるから  
大きな願いそのものに成り代わろうとするように

どこから来てどこへ行くのかと問いかけてみる  
それとも本当はどこなどありもしないだろうか  
ゆらぐいのちについて思いを巡らせてみるけれど  
眩しいほどのさざ波は果てしもなく寄せつけ  
そうして海沿いの丘では今日も風が吹いている

〔優秀賞〕

## 長谷川 航

### 喪の航海

沈黙することば あなたの霊をつなぎとめていた

言葉を捧げることで

あなたはあなたのままに

この世界につながれていた

あなたはこの世界にいるときから

世界の表皮を突き破っていた

そんなことができたなら 言葉はいりません

かつて事物は言葉ではなかった

あなたの生命と この生命が一のときは

言葉が与えられました

瞬間

あなたの霊は亡霊となって自由に彷徨します

航海の合図です

名指された「空と海を目指せ！」と

ギフトは扉を裂開する

あなたの亡霊はミシン

あなたの亡霊はパズル

あなたの亡霊は軽自動車

あなたの亡霊は浅草

あなたの亡霊は：

痕跡を手がかりに 星雲に座礁しながら

「行こう！ 喪の航海へ」

言葉を 名を 喪するため

すべてが歌うところまで

## 受賞のことば・受賞者略歴

### ●最優秀賞

小林

#### 〈受賞の言葉〉

思いがけぬ報せに、ほく自身「新しい光」をもう一度読み返した。

どうして詩を書くのだろうかとつねづね思い、しかしつねに、訝しがるよりも遙かに先立って、詩はすでに書き終えられていた。ほくの手で？

あるいは、ほくの手から落っこちた詩が、こうして誰かに読まれたりする。ときには、最優秀賞だなんて報せが、耳に入って来たりもする。

このたびは、「新しい光」をお選びいただき、ありがとうございます。

#### 〈略歴〉

一九九六年生まれ、新潟県出身。

### ●優秀賞

青山勇樹

#### 〈受賞の言葉〉

たくさん作品のなかから拙作に目をとめていただき、誠にありがとうございます。

空の青を浴びていると、いつしか詩がたちあらわれてくる。ひそやかにそよぐ風のおいのように、頬にこぼれる木洩れ陽のぬくもりのように。あるときは見えない文字として、またあるときは聞こえない声として。そうした文字を見つめ、声に耳を傾ける。絵画が色彩にあこがれ、音楽が音と、写真が光と遊ぶように、いつもことばと戯れたい。

#### 〈略歴〉

大学卒業後、国語科教諭として高等学校に赴任する。31年間の高等学校勤務のうち、後半の14年間は教頭として、学校経営や教員育成に腐心した。現在は、大学で「日本語表現」や「日本の文学」などの講義を担当し、大学の教員として教育や研究に励みながら、詩を書いている。

● 優秀賞

長谷川航わたる

〈受賞の言葉〉

「新しい詩の声」優秀賞をいただき、大変光栄です。昨年しんねんの秋から詩作が始まりました。いまでも詩作をすること、「書くこと」に躊躇ちゅうちゆいがあります。「書くこと」、この「おそれとおののき」を伴う行為は、ときに精神を蝕みます。けれど詩作という「呼びかけ」に、誰かが「読み」という形で応じてくれること。その「出来事」の生成をいまは見守ろうと思っおもっています。

〈略歴〉

1986年、京都在住。

## 作品募集と選考の概要

秋元 炯

日本詩人クラブでは、日本全国の幅広い方々と作品公募を通して連携し、詩文化の普及と発展に寄与したいと考え、「新しい詩の声」の公募を始めました。今回で第4回目の公募実施となります。作品募集は日本詩人クラブの会員ではない方を対象としています（会友の方は応募可能です）。応募作品の中から、最優秀賞（「新しい詩の声」賞）

1篇と優秀賞（奨励賞）を2ないし3篇選び、賞状・賞金を授与するとともに、日本詩人クラブのホームページに、公募状況と受賞作品、選考経緯、授賞式の模様などを、また、詩界通信にも公募状況と選考経緯、授賞式の模様などを掲載します。

第4回「新しい詩の声」には、167名の応募がありました（昨年は126名）。応募者は、北は北海道から南は沖縄県まで、10歳台の方が5名（昨年は18名）、80歳台の方が6名（昨年は0名）と、地域も年齢層も幅広い方々からご応募いただいたこ

とになります。ちなみに最年少は14歳、最高齢は87歳の方でした。男女の応募者数は、ほぼ同数でした。ご高齢でありながら詩を書き始めて間がないように見受けられる方もおられて、詩文化の担い手また受け皿となってくくださる方々の裾野を大きく広げて行ける可能性も感じ、心強く思いました。

今後、受賞者以外の参加者全員に応募作品の寸評をお送りするとともに、ご希望される方にお集まりいただき、詩をさらに深く学び、詩を語り合う「フォロアアップセミナー」を実施する予定です。

## 選考経過報告

秋元 炯

今回の「新しい詩の声」受賞者選考は、新型ウイルス流行の影響により参集しての開催が出来ず、メールとFAXによる選考委員会となりました。このため、4月11日に始まり同16日に結論に至ると長い時間をかけた委員会となり、その分、熟考を重ねることが出来たと思います。今回

の選考委員は、秋元炯（委員長）、網谷厚子、佐相憲一、曾我貢誠、谷口典子、長尾雅樹、原詩夏至（50音順）の7名でした。

先ず、予備選考では、167名の作品から、各委員が4月11日を締切日として3篇を推薦することにしました。その結果、選ばれた予備選考通過作は、以下の18篇（複数回答あり）です。青山勇樹「墓碑銘 E π i t a φ i o s」、雨後晴太郎「大好きだよ。を好きなだけ」、氏家忍「冬空」、大澤優子「私がオレンジを剥いている間に」、賀賀ひかる「ハサミ」、感王寺美智子「故郷の旅」、清中愛子「椀に沈む里」、小林「新しい光」、佐藤正樹「真白な月と目が合った」、竹野滴「詩人の妻」、中嶋康雄「バス旅行」、中原賢治「光のゆくえ」、伯井誠司「ソネット」、長谷川航「喪の航海」、松井ひろか「清風ヒヤシンスハウスにて」、三ツ谷直子「壁から出てきた少女」、柳坪幸佳「しぶきと指」と、山田裕樹「イエスタデイ」（敬称略・50音順。以下同じ）。

次いで第1次選考では、予備選考通過作18篇の

中から、各委員が各々2編、40字程度の推薦理由を付して改めて推薦することになりました。ここで残った作品は、以下の12編です。「墓碑銘 Eπιτάφιος」、「大好きだよ。を好きだけ」、「冬空」、「私がオレンジを剥いている間に」、「ハサミ」、「新しい光」、「詩人の妻」、「バス旅行」、「光のゆくえ」、「喪の航海」、「清風ヒヤシンスハウスにて」、「イエスタデイ」。

この結果、複数の推薦があった作品及び各委員がどうしても残したい作品を（これは各人1篇まで）第1次選考通過作としました。これは、以下の8篇です。「墓碑銘 Eπιτάφιος」、「大好きだよ。を好きだけ」、「冬空」、「ハサミ」、「新しい光」、「バス旅行」、「喪の航海」、「イエスタデイ」。

最終の第2次選考では、第1次選考通過作の中から、各委員が最優秀作1編と優秀作1篇を推薦することにし、最優秀作は2点、優秀作は1点を得たとカウントし、得点順に最優秀賞1篇と優秀賞を2ないし3篇選ぶことにしました。この結果、最優秀賞には、6点を得た「新しい光」、優秀賞

には、3点を得た「墓碑銘 Eπιτάφιος」と「喪の航海」が決まりました。次点は、2点を得た「大好きだよ。を好きだけ」、「冬空」、「ハサミ」、「イエスタデイ」の4篇です。第1次選考通過作は、いずれも甲乙つけがたいレベルの高い作品揃いでした。また、これらの作品以外にもユニークで個性のきらりと光る作品があったことを申し添えておきたいと思います。

受賞作の、小林「新しい光」は、行から行への繋がりが微妙にずれていて、それが現代社会のつかみどころのない不安感や喪失感という時代背景を感じさせます。また、ずれて繋がりがながらも全体としてはまとまった作品に仕上がっていることも高い技術とセンスの良さが窺えると思います。

青山勇樹「墓碑銘 Eπιτάφιος」は、言葉の選び方が実に巧みで、丁寧で緻密な仕上がりとなっているところが群を抜いていました。黙読していても、弦楽器の優美な演奏が聞こえてくるような、音楽的な作品でもあると思います。



長谷川航「喪の航海」は、ドラマチックな展開で躍動感溢れる作品でした。心が閉ざされた状態から、言葉を編むことによって解放の兆しを探り出すという、詩への賛歌であると同時に祈りも込められているのだと思います。

## 選考委員

秋元炯・網谷厚子・佐相憲一・曾我貢誠・谷口典子・長尾雅樹・原詩夏至